天界の秘義
第二章

73-181

2:1 こうして、天と地とそのすべての軍勢~~万象~~が完成された。死人→霊的→天的
2:2 それで神は、第七日目に、なさっていたわざの完成を告げられた。すなわち、第七日目に、なさっていたすべてのわざを休まれた。
2:3 神はその第七日目を祝福し、この日を聖であるとされた。それは、その日に、神がなさっていたすべての創造のわざを休まれたからである。天的人間は主が休まれた第七日
2:4 これは天と地が創造されたときの経緯である。神である主が地と天を造られたとき、
2:5 地には、まだ一本の野の<u>潅木</u>もなく、まだ一本の<u>野の草</u>も芽を出していなかった。それは、神である主が地上に雨を降らせず、土地を耕す人もいなかったからである。
2:6 ただ、霧が地から立ち上り、土地の全面を潤していた。天的人間の知識と合理性
2:7 その後、神である主は、土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで、人は、生きものとなった。天的人間の生命
2:8 神である主は、東の方エデンに園を設け、そこに主の形造った人を置かれた。
2:9 神である主は、その土地から、見るからに好ましくない木真理の感知力食べるのに良いすべての木善の感知力を生えさせた。園の中央には、いのちの木愛、それから善悪の知識の木信仰とを生えさせた。

2:10英知wisdom　一つの川が、この園を潤すため、エデンから出ており、そこから分かれて、四つの源となっていた。
（内部人間）
2:11善と真理　第一のものの名はピションで、それはハビラの全土を巡って流れ、そこには金があった。
2:12 その地の金は、良質で、また、そこには、ブドラフとしまめのうもある。
（外部人間）
2:13善と真理の知識　第二の川の名はギホンで、クシュの全土を巡って流れる。
2:14 理性　第三の川の名はヒデケルで、それはアシュルの東を流れる。
記憶知・情報　第四の川、それはユーフラテスである。
2:15 神である主は、人を取り、エデンの園に置き、そこを耕させ、またそこを守らせた。以上のものを楽しんでよい、しかし自分のものとしてはならない。
2:16 神である主は、人に命じて仰せられた。「あなたは、園のどの木からでも思いのまま食べてよい。2:17 しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べるその時、あなたは必ず死ぬ。」
与えられた感知力で善と悪の知識を得てもいいが、それを自分から、あるいは世から行ってはならない。感覚によって信仰の神秘を探し求めてはならない。天的性質が死滅してしまう。

81
1
死者：肉体と世の事柄しか認めない

霊的人間：霊的・天的な真理と善を認める。愛というより、信仰している原理から実行する。

天的人間：愛から行い、それ以外の信仰を認めない。
２　目的
死者：肉体的、世的な生活のみを顧みて、永遠の生や主のことに興味をもたない。

霊的人間：永遠の生や主のことを考える。

天的人間：主のことを考える。その結果その王国や永遠の生を考える。
3戦い
死者：常に敗北し、悪と偽が支配する奴隷
　　法を恐れ、死を恐れ、富や評価を失うことを恐れる

霊的人間：常に勝利する。良心によってのみ縛られている。

天的人間：戦いにいない。悪と偽を軽蔑し、征服者と呼ばれる。何者にも縛られない。

2:1 こうして、天と地とそのすべての軍勢~~万象~~が完成された。死人→霊的→天的
天：内部人間
地：外部人間
軍勢：愛と信仰、そこからの知識（以前は大きな光体）
完成：信仰と愛が一つとなり、信仰ではなく、愛から行う。（天的原理）

2:2 それで神は、第七日目に、なさっていたわざの完成を告げられた。すなわち、第七日目に、なさっていたすべてのわざを休まれた。
2:3 神はその第七日目を祝福し、この日を聖であるとされた。それは、その日に、神がなさっていたすべての創造のわざを休まれたからである。

第七日：天的人間
主が闘いを終了された。サバト שַׁבָּת

新改訳 マルコ
2:28 人の子は安息日~~にも~~の主です。」

2:4 これは天と地が創造されたときの経緯である。 ①天 ②地
エホバ・神である主が地と天を造られたとき、 ①地 ②天

（霊的）
神

地
（外部人間から再生が始まる）

（天的）
エホバ・神
野・土地

①天 ②地
内部人間から

2:5 地には、まだ一本の野の潅木もなく、まだ一本の野の草も芽を出していなかった。それは、神である主が地上に雨を降らせず、土地を耕す人もいなかったからである。
2:6 ただ、霧が地から立ち上り、土地の全面を潤していた。

外部人間の産物

外部人間は霊的人間である間は地であるが、
天的人間になれば、野・土地と言われる

野の灌木：天的霊的な源から出る合理的な心
野の草 ： 〃 記憶知

雨（霧）：闘いが終焉した平安の静謐→外部人間を覆う

平安：闘いの終焉・貪欲・偽りの終焉
内的な平安からわき出る生命
そこから信仰の真理と愛の善が生まれ出る

2:7 その後、神である主は、土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで、人は、生きものとなった。

animam viventem נֶפֶשׁ 24 חַיָּה 25

土地のちりで人を形造り:外部人間の形成：以前は人はいない

その鼻にいのちの息を吹き込む：信仰と愛の生命を与える

<u>生きた魂</u>となった：外部人間が生きる

95
2:6では信仰と知性
2:7では愛と意志
96
鼻・香：感知力

97
נְשָׁמָה息・風・霊：最古代教会では、愛と信仰の状態を呼吸で感知していた。

98
2:8 神である主は、東の方エデンに園を設け、そこに主の形造った人を置かれた。

園：知性
エデン：愛
東：主

天的人間の知性は愛を通して主から流入する。

99
生命の秩序ordo vitae
主ー（信仰fides）→（intellectualis知性）→(rationalis理性）→(scientificus記憶知）

霊的人間
　外部人間が抵抗し、
　　自分から、記憶知・理性を通して、流入するように見える
天的人間
　　主から、 愛と愛の信仰を通して、知性・理性・記憶知に流入
　内部人間と外部人間の戦いはないので、そのままに見える。本来の生命の秩序
→hortus in Eden ab orientie 東（主）からエデン（愛）の内にある園
　主ご自身・天界（現世にいながら天界にいる）

102
2:9 神である主は、その土地から、見るからに好ましく食べるのに良いすべての木を生えさせた。園の中央には、いのちの木、それから善悪の知識の木とを生えさせた。

木arbor=perceptio 感知・直観
見るのに良い木　　真理の直観
食べるのに良い木　善の直観
いのちの木　　愛と愛から生じた信念
善悪の知識の木　　感覚や記憶知から発生した信念

104
Perceptio 主のみから来る善と真理についての内的感覚

Conscientia 良心・意識：霊的人間

死人は直観力も良心も持たない。

105 園の中央：内部人間の意志
　　意志・心　主のもの
　　欲念　　人間のもの
　　いのちの木　主の慈悲　愛と信念のすべてが発する

107
2:10 一つの川が、この園を潤すため、エデンから出ており、そこから分かれて、四つの源となっていた。

エデンから出た川：愛からくる英知
が園を潤し　　：知性を与え
四つの源　　：知性の説明

110
2:11 第一のものの名はピションで、それはハビラの全土（mens精神）を巡って流れ、そこには金（愛の善）があった。
2:12 その地の金（愛からくる善の信念）は、良質で、また、そこには、ブドラフ（愛の真理）としまめのう（愛からくる信仰すべき真理）もある。

116
2:13 第二の川の名はギホン(善と真理のcognitio 認識）で、クシュの全土（精神mens又は機能）を巡って流れる。

117
クシュ＝エチオピア＝シバ

118
2:14 第三の川の名はヒデケル（理性ratio, 理性の明澄）で、それはアシュル（理性的な心）の東を流れる。第四の川、それはユーフラテス（記憶知、境界、最終）である。

121
天的人間の生命の秩序

主（東）
↓
Sapientia 英知・知恵
↓
Intelligentia 知性　知的本質を直観
↓
Ratio 理性
↓
Scientifica 記憶知

申命1:13 あなたがたは、部族ごとに、知恵があり、悟りがあり、経験のある人々を出しなさい。彼らを、あなたがたのかしらとして立てよう。」

2:15 神である主は、人を取り、エデンの園(天的人間の全て)に置き、そこを耕させ、またそこを守らせた。

これらすべてを享受してよいが、自分のものとしてはならない。なぜならそれは主のものだから

天的人間は、以上を直観する。
霊的人間は、口では認める。
物質的人間は、認めない。

ヨハネ16:13 しかし、その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導き入れます。御霊は自分から語るのではなく、聞くままを話し、また、やがて起ころうとしていることをあなたがたに示すからです。
16:14 御霊はわたしの栄光を現わします。わたしのものを受けて、あなたがたに知らせるからです。

3:27 ヨハネは答えて言った。「人は、天から与えられるのでなければ、何も受けることはできません。

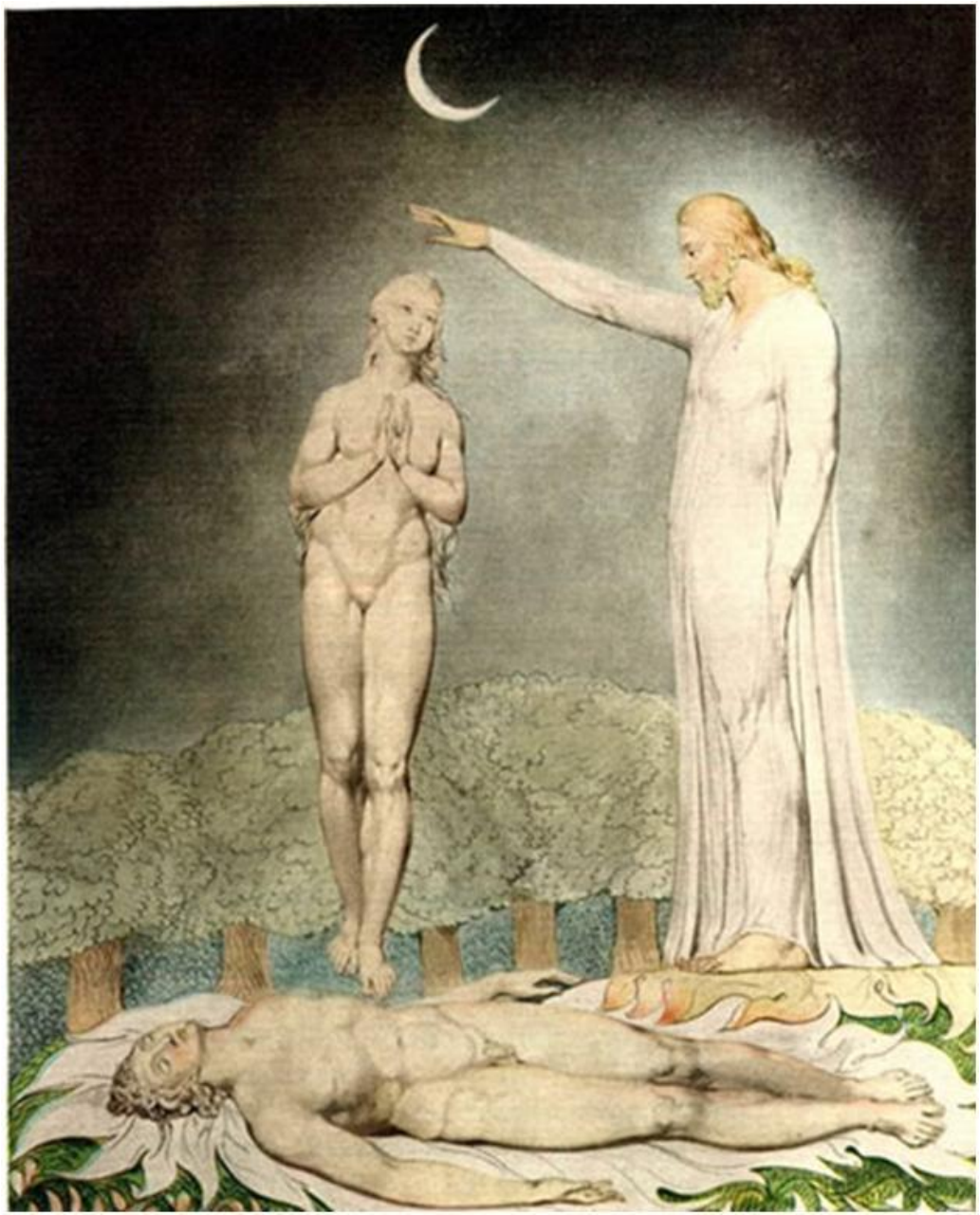
125
2:16 神である主は、人に命じて仰せられた。「あなたは、園のどの木からでも思いのまま食べてよい。

天的人間　継続的直観（主・天使との会話、幻や夢→記憶に蓄えられ真理かどうか即座に判断）
126
2:17 しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べるその時、あなたは必ず死ぬ。」

主から得た直観によって善で真であるものを得ても良い
しかし自分から得た、あるいは世から得たものはだめ。
→信仰の神秘を感覚的・記憶知から求めると、天的なものが破壊される。
→これはあらゆる教会の堕落の源127
129
一般的に、自分の定律した原理原則によって、自分が支配されてしまう。
一端誤ったものを原理原則としてしまうと、あらゆるものを動員して、誤った原理原則を確認してしまう。（→西・魔術、地獄にあるエデンの木130)
理性・知識・感覚・自然によって信仰の神秘を探ることはできない。なぜなら天的・霊的なものは目に見えず、想像によって思いつくこともできないから。

科学を否定するものではない。
主と主のみことばを始点とせねばならない。
その上で、天的・霊的真理を、自然的真理によって、可能な限り学術用語を通して、確認せねばならない。

第二章　後半　最古代教会の堕落の始まり



131~最古代教会の子孫がプロプリウムに傾いてゆく様が描かれている。

2:18 その後、神である主は仰せられた。「人が、ひとりでいるのは良くない。わたしは彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう。」（プロプリウムの付与）
2:19 神である主が、土からあらゆる野の獣と、あらゆる空の鳥を形造られたとき、それにどんな名を彼がつけるかを見るために、人のところに連れて来られた。人が、生き物につける名は、みな、それが、その名となった。
2:20 こうして人は、すべての家畜、空の鳥、野のあらゆる獣に名をつけたが、人にはふさわしい助け手が、見あたらなかった。（善への情愛と、真理の認識cognitioが与えられたが、プロプリウムに惹かれる）
2:21 そこで神である主が、深い眠りをその人に下されたので彼は眠った。それで、彼のあばら骨の一つを取り、そのところの肉をふさがれた。
2:22 こうして神である主は、人から取ったあばら骨を、ひとりの女に造り上げ、その女を人のところに連れて来られた。
2:23 すると人は言った。「これこそ、今や、私の骨からの骨、私の肉からの肉。これを女と名づけよう。これは男から取られたのだから。」（プロプリウムが与えられる）
2:24 それゆえ、男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである。
（プロプリウムに天的・霊的生命が加えられる）
2:25 そのとき、人とその妻は、ふたりとも裸であったが、互いに恥ずかしいと思わなかった。
（無邪気・無罪が吹き込まれる）

138
2:18 その後、神である主は仰せられた。「人が、ひとりでいるのは良くない。わたしは彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう。」
139
ひとりで住む：天的人間のように主の導きのもとにいること。
なぜなら、悪や悪霊によって悪い影響を受けない。
国々（悪）の中に住むことを望む→既に悪の中にいる→助け手が与えられる。

エレミア49:31 さあ、安心して住んでいるのんきな国に攻め上れ。——主の御告げ。——そこにはとびらもなく、かんぬきもなく、その民は孤立して住んでいる。

出エ33:28 こうして、イスラエルは自信をもってひとりで住まう。

民数23:9 見よ。この民はひとり離れて住み、諸国の中にいることに納得しない。

140 助け手：プロプリウム
この教会はまだ良い気質であったので、プロプリウムが与えられたものの、。「助け手」といわれるプロプリウムにあたかも見えるようなもの、が与えられた

141プロプリウム

物質的人間：プロプリウムが全て。それ以外は想像できず、プロプリウムが奪われたなら滅んでしまうと考える。

霊的人間：主が生命の源泉であり、知恵と知性のすべてを与えられていると口にするが、心からというよりも、口だけで唱える。

天的人間：主が生命の源泉だと直観している。プロプリウムを望まない。究極の平安と静謐の中に安んじている。

142
2:19 神である主が、土からあらゆる野の獣(天的情愛)と、あらゆる空の鳥(霊的情愛)を形造られたとき、それにどんな名を彼がつける(性質を知る)かを見るために、人のところに連れて来られた。人が、生き物につける名は、みな、それが、その名となった。
2:20 こうして人は、すべての家畜、空の鳥、野のあらゆる獣に名をつけたが、人にはふさわしい助け手が、見あたらなかった。(プロプリウムに惹かれていた)

147
2:21 そこで神である主が、深い眠り(プロプリウムを自分が持って、生きているかのような状態)をその人に下されたので彼は眠った。それで、彼のあばら骨(生命力の薄いが、自分にとっては大切なプロプリウム)の一つを取り、そのところの肉をふさがれた。

151
2:22 こうして神である主は、人から取ったあばら骨を、ひとりの女(主によって生命力を与えられたプロプリウム)に造り上げ(堕落したものを立て直す)、その女を人のところに連れて来られた。

156
2:23 すると人אָדָם は言った。「これこそ、今や（状況の変化）、私の骨からの骨、私の肉からの肉。これを女妻אִשָּׁה issahと名づけよう。これは男אִישׁ ‘iys（内部人間）から取られたのだから。」

159
天的人間：内部人間と外部人間と明確に区別し、外部人間は内部人間を通して主によって統治。
その子孫：プロプリウムを切望するあまり、内部人間を直観できず、内部人間と外部人間は一つのものだと思う。

2:24 それゆえ、男はその父母を離れ（内部人間から退いて）、妻と結び合い（内部が外部の中にあって）、ふたりは一体となる（天的生命と霊的生命がプロプリウムと結合）のである。

2:25 そのとき、人とその妻は、ふたりとも裸であったが、互いに恥ずかしい（無邪気・無罪が注入される）と思わなかった。